青年期の女性の父親に対する回避傾向

羽成隆司　河野和明　伊藤君男　角田千夏

要約

本研究は、青年期の女性の父親に対する回避傾向に着目し、日常場面における父親および他の対象への回避程度を質問紙調査によって測定した。質問紙調査では、父親、母親、父親に近い年齢の知人男性、自分に近い年齢の知人男性に対して、日常的な接触またはコミュニケーションの8場面を想定して、それぞれの場面でどの程度の嫌悪を感じるかを3件法で尋ねた。大学在学中の男女275名（207名の女性、68名の男性）の回答結果を分析した。8場面の嫌悪評定値を合計した回避得点を分析した結果、女性は、父親に近い年齢の知人男性に対して最も回避傾向が高く、次が自分に近い年齢の知人男性と父親、母親には最も回避傾向が低かった。男性も、父親に近い年齢の知人男性に対する回避傾向が最も高かったが、その他の対象の間にはほとんど差は見られなかった。また、父親に近い年齢の知人男性と自分に近い年齢の知人男性に対してはいずれも男性より女性が高い回避傾向を示したが、父親に対しては回答者の性差が見られなかった。一方、母親に対しては、女性の方が男性よりも回避傾向が低かった。本研究で想定した場面においては、女性が強く父親を回避するというよりは、女性は母親への親和性がより明確に見られることが確認された。

はじめに

これまで我々は、青年期の男女を調査対象として、肉親、友人、恋愛対象者など、親密な他者に対する嫌悪感や接触回避の特徴について検討してきた。それらでは、女性の男性に対する回避傾向の相対的な高さ、一方で女性の女性に対する親和性の強さが確認されている（羽成・河野・伊藤、2009、2011）。我々はその要因の一つとして、進化心理学的な立場にもとづき、性戦略上の必要性という観点から解釈を行ってきた（Kawano, Hanari, & Ito, 2011; 羽成・河野・伊藤、2012）。そして、親密な関係にある者に対しても、男性に比べて女性は異性に防衛的であると推測した。

ヒトという種にとって、妊娠、出産のコストは非常に大きく、その大半は女性が担っている。このため、配偶者選択の失敗を避ける必要性は女性にとってより大きくなる（概説は、Cartwright, 2000など）。これが女性にとって配偶者選択をより慎重にさせる結果、基本的に男性に対して防衛的な認知・行動をとらせるのではないか（例、Haselton & Buss, 2000）。女性にとっての異性の肉親、つまり、父親や兄弟は、通常、配偶者候補とはならない。それは血縁が近いからであるが、まさに血縁が近いからこそ、性的な接触を避けなければならない（概説は、Silverman & Bevc, 2004など）。そのため、父親や兄弟に対しても、一定程度の接触回避の傾向が見られるのではないか、という解釈である。日常的なコミュニケーション場面においても、思春期以降から、女性がとくに父親を嫌悪したり、回避したりする傾向が現れることはよく知られているところである。父親に批判的になり、会話の量が少なくなることも多い。また、手をつなぐ、一緒に入浴するなどと

いった行動も、思春期以降はあまりとられなくなる。確かに血縁が最も近い父親や兄弟との性的関係は回避する必要があるため、こうした接触を伴う行動を回避しようとすることには、性戦略上の妥当性がある。

しかし、このような異性の肉親に対する女性の嫌悪や回避傾向は、性戦略の観点からだけでは説明できない。思春期以降によく現れる、とくに父親への嫌悪や回避傾向は男性にも見られるものであるし、会話のように接触を伴わないコミュニケーションであっても、男女いずれもその量が減少することがある。おそらく、女性にとっては、理想の配偶者像と身近な男性モデルである自分の父親との隔たりからもたらされる不快感情、男性にとっては理想の男性像と身近な男性モデルである父親との隔たりからもたらされる不快感情、あるいは自立に向けての障害となる父親への反抗といった要因等も、父親への嫌悪や回避傾向に影響を与えていると思われる。さらに、男性は女性より身だしなみに気を遣わず、従って相対的に女性よりも不潔であるという一般的な性的ステレオタイプが存在するかもしれない。加えて、加齢による容貌の衰えや中高年であること自体に不潔感を感じるような一般的傾向もあるかもしれない。青年期の子をもつほとんどの親は中年期以降の年代なので、多くの父親は男性かつ中高年である。その結果、一般的に嫌悪対象になりやすい可能性もある。

また、性戦略的な観点からの説明と父親への回避傾向に整合性があるとしても、このような“究極的説明”だけでなく、どのような要因が回避傾向に直結しているかという“至近的説明”も必要であろう。その一端を示唆するものとして、両親の仲の良さや父親とのコミュニケーション頻度が回避傾向に影響することを指摘する研究（岩崎、2003）もある。

したがって、肉親に対する嫌悪や回避傾向の要因については、さらに慎重な検討を行う必要がある。そこで本研究では、とくに、女性の父親に対する回避傾向に着目し、日常的な場面での回避傾向がどのように現れるかを明らかにするために、質問紙による調査を行った。女性の特徴を明確にするために、これまでの我々の研究と同じく、大学生男女を調査の対象とした。直接的または間接的な身体接触場面、および、日常的に見られるコミュニケーション場面を想定して、その場面における嫌悪の程度を測定した。また、父親への反応の特徴を明確にするため、母親、父親に近い年齢の知人男性、自分に近い年齢の知人男性に対する嫌悪の程度も測定した。そして、それぞれの対象についての回答者の性差、対象間での嫌悪の程度を比較した。

方法

調査対象

愛知県内の大学の学部学生275名（女性207名、男性68名）を分析の対象とした。平均年齢は女性が20.0歳（SD＝1.0）、男性が20.0歳（SD＝1.2）であった。彼らは、心理学関連の授業の受講生中からリクルートされたボランティアであった。

質問紙

質問紙調査では、父親、母親、父親に近い年齢の知人男性、自分に近い年齢の知人男性に対する回避傾向の程度を中心に測定した。父親に近い年齢の知人男性、自分に近い年齢の知人男性については、それぞれ該当する人物一人を想起させ、彼らのイニシャルと彼らとの関係（例：バイト先の上司、大学のサークル仲間）を質問紙に記入させた。ここで親類を挙げた場合（例：叔父、自分の兄弟、いとこ）は分析対象から除外した。

回避傾向の程度は、8つの場面について、どの程度それを嫌だと感じるか、3段階（そう思う、どちらかと言えばそう思う、そう思わない）で評

定させることにより測定した。

その8項目とは、(1) その人が使った後のトイレを使用すること、(2) その人が入った後のお風呂（湯船）に入ること、(3) 自分の服とその人の服を一緒に洗濯すること、(4) その人と一緒の鍋をつつくこと、(5) その人から触れられること、(6) その人と同じコップ（洗ってあるもの）で飲み物を飲むこと、(7) その人と2人で外食に出かけること、(8) その人と並んで外を歩くこと、であった。これらは、河野ら（2012）による「接触回避尺度」の一部に、日常的な接触場面を追加して作成したものであった。

また、父親と母親については、1日の会話時間がどの程度かを尋ねた。さらに父親についてのみ、父親を一番嫌だと思っていた時期、および、父親と一緒に入浴していた上限時期を尋ねた。

手続き

大学の授業終了後、質問紙調査を実施した。実施前の説明は、本論文執筆者が行った。説明の中では、参加者には質問項目すべてについて率直に回答することを求めたが、さらに、倫理的配慮を含めて、以下に言及した。質問紙には、質問文を読んだ際や、回答している際に不快感を持つことがあるかもしれないこと、そのため、ボランティアとして参加する意思を表明した後であっても、回答はまったくの任意であって、はじめから回答を拒否できること、回答をはじめた後で、いつでも回答の中止が可能であること、さらに、無記名での回答のため、回答の中止や拒否によって不利益を被ることはないことを強調した。以上の説明内容は、質問紙の表紙にも記述されていた。参加者の匿名性を確保するために、事前の署名は求めず、質問紙本体にも記名は求めなかった。

結果と考察

8つの場面ごとの各人物に対する嫌悪の評定値平均、および、これら8つの評定値の合計を表1に示した。

8つの場面の評定値の合計を回避得点として、回答者の性（女・男）×対象者の種類（父親・母親・父親に近い年齢の知人男性・自分に近い年齢の知人男性）の2要因分散分析を行ったところ、両要因の交互作用が有意となった（$F=11.35$、$df=3$、771、$p<.01$）。そのため、多重比較（LSD検定）によって、各回避得点間の差異を分析した。女性回答者では、父親に近い年齢の知人男性が他の対象のいずれよりも回避得点が有意に高く（すべて$p<.01$）、次に父親、および、自分に近い年齢の知人男性が高く、母親は他の対象のいずれよりも有意に低かった（すべて$p<.01$）。男性回答者でも、父親に近い年齢の知人男性が他の対象のいずれよりも回避得点が有意に高かったが（すべて$p<.01$）、他の対象の間の差は有意ではなかった。また、父親に近い年齢の知人男性、自分に近い年齢の知人男性、母親への回避得点は、女性回答者と男性回答者の間でいずれも有意差が見られた（順に、$p<.0$、$p<.05$、$p<.01$）。すなわち、父親に近い年齢の知人男性と自分に近い年齢の知人男性に対しては、女性回答者の回避得点が男性回答者より高く、母親に対しては、女性回答者の回避得点が男性回答者より低かった。一方、父親に対する回避得点については、回答者間での性差は有意ではなかった。

以上から、女性回答者は、父親に近い年齢の知人男性に対して最も回避傾向が高く、次が自分に近い年齢の知人男性と父親、最も低いのは母親であること、男性回答者も、父親に近い年齢の知人男性に対する回避傾向が最も高いが、その他の対象の間には明確な差はないこと、父親に近い年齢

表1　各場面における嫌悪の程度の平均値。(　)は標準偏差。
数値が高いほど、嫌悪の程度が高いことを表す。

(1) その人が使ったあとのトイレを使用すること

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.46 (0.68)	1.07 (0.29)	1.65 (0.77)	1.31 (0.60)
男性回答者	1.56 (0.74)	1.39 (0.65)	1.57 (0.72)	1.28 (0.57)

(2) その人が入った後のお風呂（湯船）に入ること

	評定対象者			
	評定対象者	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.54 (0.76)	1.10 (0.39)	2.32 (0.77)	1.68 (0.76)
男性回答者	1.37 (0.69)	1.29 (0.62)	1.95 (0.81)	1.25 (0.57)

(3) その人の服と自分の服を一緒に洗濯すること

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.14 (0.42)	1.00 (0.07)	1.90 (0.84)	1.29 (0.60)
男性回答者	1.12 (0.41)	1.06 (0.24)	1.43 (0.74)	1.14 (0.43)

(4) その人と一緒の鍋をつつくこと

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.08 (0.34)	1.02 (0.18)	1.57 (0.79)	1.15 (0.45)
男性回答者	1.13 (0.42)	1.10 (0.35)	1.35 (0.66)	1.08 (0.32)

(5) その人から触れられること

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.40 (0.65)	1.09 (0.35)	1.97 (0.85)	1.32 (0.61)
男性回答者	1.29 (0.62)	1.28 (0.62)	1.42 (0.72)	1.09 (0.38)

(6) その人と同じコップ（洗ってあるもの）で飲み物を飲むこと

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.21 (0.50)	1.01 (0.10)	1.82 (0.85)	1.21 (0.53)
男性回答者	1.35 (0.66)	1.29 (0.62)	1.67 (0.86)	1.26 (0.59)

(7) その人と2人で外食に出かけること

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.35 (0.64)	1.08 (0.36)	2.01 (0.85)	1.21 (0.53)
男性回答者	1.28 (0.62)	1.26 (0.59)	1.57 (0.81)	1.05 (0.28)

(8) その人と並んで外を歩くこと

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	1.29 (0.58)	1.07 (0.33)	1.65 (0.80)	1.14 (0.44)
男性回答者	1.26 (0.61)	1.37 (0.64)	1.43 (0.72)	1.05 (0.28)

回避得点（8項目の合計値）

	評定対象者			
	父親	母親	父親に近い年齢の男性	自分に近い年齢の男性
女性回答者	10.56 (3.40)	8.52 (1.75)	14.88 (4.84)	10.32 (3.39)
男性回答者	10.37 (3.79)	10.06 (3.12)	12.38 (4.69)	9.18 (2.70)

の知人男性と自分に近い年齢の知人男性に対して、女性回答者の方が男性回答者より高い回避傾向を示すこと、父親に対しては回答者間の性差が見られないこと、一方、母親に対しては、女性回答者の方が男性回答者より回避傾向が低く親和性が高いことが明らかとなった。

本研究で想定した場面においては、女性回答者が男性回答者に比べて強く父親を回避しているわけではなかった。場面ごとに見ると、女性回答者が男性回答者より父親に回避傾向があることが明瞭に認められたのは、「その人が入った後のお風呂（湯船）に入ること」のみであった。本研究では、河野ら（2012）による「接触回避尺度」をそのまま用いるのではなく、この尺度項目の一部と、日常的な場面（洗濯、外食、一緒に歩く）を加えて質問項目を設定した。父親への回避傾向が潜在的にあるとしても、家庭内でのきわめて日常的な場面においては、それらは顕在化しにくいのかもしれない。また、河野ら（2012）の「接触回避尺度」は7件法であるが、本研究は3件法により回答を求めていることが、回避傾向の検出を弱めていた可能性もある。

確かに女性回答者は母親よりも父親に対しての回避傾向が高く、これは男性回答者には見られない特徴であった。しかし、これは、女性がより父親に回避的であるというよりも、母親への親和性が強いことを示している。我々が以前に行った身体接触に限定した調査では、女性回答者は、異性の肉親（父親、兄弟）を同性の肉親（母親、姉妹）よりも強く回避している一方、男性回答者は対象者の性によって回避の程度をほとんど変化させないこと、また、父親と兄弟への回避は男性より女性の方が強いことが示されている（羽成ら、2009）。本調査でも前者については同様の傾向が確認されたが、後者については確認されなかった。上述のように、想定する場面の設定や評定方法を再検討してみる必要がある。

表2、表3は、父親、母親との1日の会話時間の分布である。男女回答者いずれも母親との会話時間の方が長く、また、母親、父親いずれについても男性回答者より女性回答者の方が長い。コミュニケーションの量は男女回答者いずれも母親との方が多く、とくに女性回答者で多いと言える。女性は一般的に対人的な共感性が高く（Baron-Cohen et al., 2005）、自己開示の程度も高い（Derlega, et al., 1993）など、他者に対して親和的な傾向があるが、とくに母親への親和性の高さがここでも反映されていると考えられる。

表4、表5は、いずれも父親についてのみ尋ねた「父親を一番嫌だと思っていた時期」と「父親と一緒に入浴していた上限時期」の分布である。父親を一番番嫌だと思っていた時期は、男女回答

表2　父親との1日の会話時間の分布

	ほとんどしない	30分未満	30分～1時間	1時間以上
女性回答者	28.6%	31.1%	25.7%	14.6%
男性回答者	35.3%	35.3%	20.6%	8.8%

表3　母親との1日の会話時間の分布

	ほとんどしない	30分未満	30分～1時間	1時間以上
女性回答者	5.3%	14.1%	29.6%	51.0%
男性回答者	16.2%	23.5%	33.8%	26.5%

表4　父親を一番嫌だと思っていた時期の分布

	幼稚園、保育園	小学校低学年	小学校高学年	中学校	高校	現在	思ったことはない
女性回答者	0.5%	1.0%	7.2%	27.1%	19.3%	10.6%	34.3%
男性回答者	0%	10.3%	5.9%	22.1%	20.6%	7.4%	33.8%

表5　父親と一緒に入浴していた上限時期の分布

	幼稚園、保育園	小学校低学年	小学校高学年	中学校	高校	現在	入浴したことはない
女性回答者	23.7%	52.7%	15.4%	1.4%	0%	1.0%	5.8%
男性回答者	26.5%	60.3%	8.8%	2.9%	0%	1.5%	0%

者いずれも小学校高学年から高校までに集中しており、それぞれの割合はほぼ同じであった。一緒に入浴することは、男女回答者いずれも、大半が小学校高学年までに終了している。父親への嫌悪が明瞭に現れたり、身体接触の回避が始まったりする時期は、いわゆる思春期あたりであることが確認できる。しかし、「(嫌だと) 思ったことはない」の割合は男女回答者でほぼ同じであり、その他にも男女回答者間の大きな違いは見られないことから、父親への回避傾向の性差はこれらには現れていないことがわかる。

父親を一番嫌だと思っていた時期、父親と一緒に入浴していた上限時期、父親との1日の会話時間、母親との1日の会話時間、各人物に対する回避得点（4種類)、計8項目間のそれぞれの相関分析を行ったところ、以下の結果となった。

男性回答者において父親への回避得点と有意な相関があったのは、父親を一番嫌だと思っていた時期（$r=.38$、$p<.01$)、父親との1日の会話時間（$r=-.35$、$p<.01$)、母親への回避得点（$r=.54$、$p<.01$）であった。最近まで父親を嫌っていた場合ほど、また、1日の会話時間が短いほど父親への回避傾向が高いこと、父親への回避傾向が高い場合は、母親への回避傾向も高くなることが伺える。女性回答者において父親への回避得点と有意な相関があったのは、父親を一番嫌だと思っていた時期（$r=.45$、$p<.01$)、父親と一緒に入浴していた上限時期（$r=-.17$、$p<.05$)、父親との1日の会話時間（$r=-.34$、$p<.01$)、母親への回避得点（$r=.29$、$p<.01$)、父親に近い年齢の知人男性への回避得点（$r=.22$、$p<.01$）であった。男性回答者と同じく、最近まで父親を嫌っていた場合ほど、1日の会話時間が短いほど父親への回避傾向が高いこと、父親への回避傾向が高い場合は、母親への回避傾向も高くなることがわかる。これらに加えて、相関係数が小さいものの、最近まで一緒に入浴していた場合ほど父親への回避傾向が低いこと、父親への回避傾向が高い場合は、父親に近い年齢の知人男性への回避傾向も高くなることが示唆された。

会話や一緒に入浴することはコミュニケーションそのものであるから、これらと回避傾向が負の相関を示していることには整合性があり、先行研究（岩崎、2003）とも一致する結果と言える。母親への回避得点についても、男女回答者いずれも、母親との1日の会話時間との間に負の相関が有意であった（女性：$r=-.33$、$p<.01$、男性：$r=-.37$、$p<.01$)。ただし、男性回答者では、父親との1日の会話時間と、母親への回避得点との間にも有意な負の相関が見られた（$r=-.38$、$p<.01$）のに対して、女性回答者では、このような関係が見られなかった。また、父親への回避傾向と母親への回避傾向の相関係数は、男性回答者に比べて女性回答者の方が有意に小さかった（男性 .54、女性 .29; $p<.05$)。このような性差と女性回答者における母親への親和性とが関連したものかどうかについても、今後検討を行う必要がある。

結論

女性回答者の父親に対する回避傾向は、父親に近い年齢の知人男性よりは弱く、自分に近い年齢の知人男性と同程度であったが、母親より強かった。一方、男性回答者の父親に対する回避傾向は、女性と同じく父親に近い年齢の知人男性より

は弱かったが、母親や自分に近い年齢の知人男性と同程度であった。また、女性回答者は、父親に近い年齢の知人男性と自分に近い年齢の知人男性といった他人異性に対しては男性回答者より強い回避傾向を示したが、父親に対する回避傾向は、男性回答者と同程度であった。したがって、本研究で設定した場面においては、女性回答者が男性回答者より強く父親を回避しているのではなく、女性回答者は男性回答者に比べて、母親により親和的であると結論づけられる。ただし、本研究で設定した場面以外での再現性や、回避の程度を評定する方法の妥当性についてはさらに検討が必要である。

REFERENCES

Baron-Cohen S., Knickmeyer R. C., & Belmonte, M. K. (2005) Sex differences in the brain: implications for explaining autism. *Science*. 310, 819–823.

Cartwright, J. (2000) Evolution and Human Behaviour. New York: Palgrave.

Derlega, V. L., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S. T. (1993) *Self-disclosure*. London: Sage.

羽成隆司・河野和明・伊藤君男（2009） 父母やきょうだいに対する嫌悪感はインセスト回避の表れか？ 椙山女学園大学文化情報学部紀要第9巻第2号、45–54。

羽成隆司・河野和明・伊藤君男（2011） 配偶者選択の点から見た身体に対する接触回避の適応的意義。椙山女学園大学文化情報学部紀要第11巻、91–98。

羽成隆司・河野和明・伊藤君男（2012） 恋愛対象者への熱愛度と肯定および否定的感情 ―日本語版熱愛尺度を用いて―。椙山女学園大学文化情報学部紀要第12巻、65–69。

Haselton, M. G., & Buss, D. M. (2000) Error management theory: A new perspective on biases in cross-sex mind reading. Journal of Personality and Social Psychology, 78, 81–91.

岩崎かおり（2004） 父親に対する娘の嫌悪感についての研究。女性学評論、18、133–134。

Kawano, K., Hanari, T. and Ito, K. (2011) Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: mate choice. *Psychological Reports*. 109, 639–648.

河野和明・羽成隆司・伊藤君男（2012）「接触回避尺度」開発の試み。東海学園大学紀要第18号、155–161。

Silverman, I. & Bevc, I. (2004) Evolutionary origins and ontogenetic development of incest avoidance. In, B. J. Ellis and David F. Bjorklund (eds.) Origins of the Social Mind: Evolutionary Psychology and Child Development, pp. 292–313. New York: Guilford Press.

はなり・たかし / 文化情報学部教授
E-mail：hanari@sugiyama-u.ac.jp
かわの・かずあき / 東海学園大学人文学部教授
いとう・きみお / 東海学園大学人文学部准教授
つのだ・ちなつ / 文化情報学部